

## Chapter 7 カナディアンとその人々の過去を振り返る

(Looking Back at Canadians and Their Past)

Clark, A. & Peck, C. [eds.] (2020) *Contemplating Historical Consciousness*, pp.103-112.

### 【著者紹介】ピーター・セイシャス (Peter Seixas)

**所属**：ブリティッシュ・コロンビア大学・教育学部・名誉教授

Centre for the Study of Historical Consciousness や

The Historical Thinking Project の創始者・代表者

**研究**：歴史的思考や歴史意識に関する教育・学習について

**著書**：Canadians and Their Pasts (2013)

本稿で要約する Chapter 7 は、本書に基づいて執筆されている！

(カナダ人の歴史意識の調査報告書→[こちらから](#))

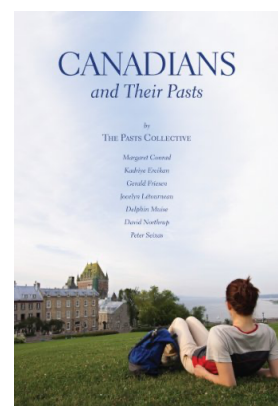
(1章から5章はプレビューできる→[こちらから](#))

New Directions in Assessing Historical Thinking (2015)

The Big Six: Historical Thinking Concepts (2012)

Knowing, Teaching, and Learning History (2008)

Theorizing Historical Consciousness (2006)



### 【専門用語】

- historical consciousness：歴史意識
- collective memory：集合的記憶
- historical culture：歴史文化

### 【論点】

①日本で同様の調査を実施する場合のサンプリング：誰の歴史意識を判断するか？

②本稿のラストで取り上げられていた記憶研究の課題：私的な記憶方法・記憶の表現方法を研究対象化することは、どの学問領域・研究チームによって実施できそうか？教科教育学単独では厳しそう…

## 1. プロジェクトのレンズ：「歴史意識」

### ●セイシャスのキャリアにおける「歴史意識」研究の萌芽的問い

- 高校の教師としてのキャリアを経て、歴史意識に辿り着いた（2つの萌芽的問いを抱えていた）
  - 「より良い／より有能な歴史的思考とはどのようなものか」
  - 「どうすれば生徒がより有能になるのを助けることができるのか」

### ➤ 理想の「歴史的思考」モデルとの出会い（3つ）

- ①ジョン・レヴィンソンの「解釈の美德」→証拠を尊重し、既成の知識に批判的な態度を示し、自らの物語の解釈的な性質を認めている歴史家の仕事（専門的知識のモデルの一種としての「歴史的思考」）
- ②サム・ワインバーグの「On the reading of historical texts」→「歴史家の美德」が強化された
- ③イングランドのSHP→証拠・原因・説明などの二次的な歴史概念を扱う能力を向上させ、分析できる枠組みを開発した

### ➤ 理想の「歴史意識」モデルとの出会い（リューゼンの4類型からなる「歴史意識」モデル）

→人類の文化の時間的发展と子どもの成長の両方に反映できる可能性がある

### ●プロジェクトにあたっての根本的な問い：私たちは誰の歴史意識を判断するのか？

- 上記のモデルは、歴史を理解する上で潜在的な進歩があるという共通基盤を持っている
  - 練られた教材を活用し、「レベル」を評価することによって、生徒の歴史理解の向上を促していた
- プロジェクトチーム内の歴史家やパブリック・ヒストリアンからの批判
  - ①人々が過去をどのように理解しているかを判断するのは誰か？
  - ②そこで得られた評価は、調査の目的のみに活かされるだけで良いのか？
  - アボリジニ史、女性史、労働史、パブリック・ヒストリーの分野で活躍してきた歴史家からは、対象となる過去の人物がいかに関与し、働いてきたかを理解しており、そうした物語を利用して、カナダの歴史学に深みと豊かさを提供し、それまで主流だった狭い政治史を拡大してきた
  - だからこそ、一般のカナダの人々がどのように過去を理解し、自分の人生を形成するために過去を利用するかという、ある種のポピュリズム的な響きを忌避し、レベルやランキングで能力を評価したり、歴史の理解が洗練化するという発想それ自体を「相容れないもの」と批判した

### ●プロジェクトの前身：アメリカにおける「The Presence of the Past」プロジェクト

- ローゼンツアヴァイク&テーレンによる「アメリカ人の過去への関心と関与」インタビュー
  - 約800人：アメリカ成人
  - 約200人：アフリカ系アメリカン・スー系インディアン・メキシコ系アメリカン
- 調査の際には、「歴史」ではなく「過去」という言葉を使用した
  - 「歴史」という言葉は、暗記した日付、退屈な教師、ほこりを被った古文書のようなイメージを持っている学校の教科「歴史」と結びついてしまうから

## 2. プロジェクトの概要：方法・サンプル・問い・結果

➤ プロジェクトは、カナダの多様性を統計的に反映し、可能な限り大規模で包括的な全体像を描きたいという野心的な考えからスタートした

➤ 方法・サンプル：18歳以上の成人（電話でのインタビュー招待への回答率は53%：3419名）

- ① ブリティッシュ・コロンビア州，プレーリー地区，オンタリオ州，ケベック州，アトランティック・カナダ地区：2219人（各400人ほど）
- ②（大都市を追加）モントリオール，トロント，エドモントン，カルガリー，バンクーバー：900人
- ③（周縁グループを追加）アボリジニ，ニューブランズウィック州のフランス語を話すアカディア人，特に最近移民してきた人々：300人（各100）

➤ 問い：6つのカテゴリ

- ① 歴史や過去への一般的な関心：全体のサンプルを無作為に分け、「過去」・「歴史」・「歴史と過去」との表現を3分の1ずつにして，一般的な関心を尋ねた→回答率に統計的な有意差はなかった
- ② 歴史や過去に関する活動：家族史とパブリック・ヒストリー，歴史を表現すること（本やゲーム，古い実家を訪ねること），保存すること（写真を撮ったり，スクラップしたりすること）などを尋ねた
- ③ 過去に関する理解と繋がり：「あなたの過去に関する活動は，過去を理解し，自分自身を理解し，過去との繋がりを感じるために，どのように役立っているか」
- ④ 過去に関する信頼できる情報源：「どの媒体が信頼できるか」「それはなぜ信頼できると思いますか」「過去に起こったことについて人々が意見を異にするとき，実際に起こったことの可能性が高いものをどのように見つけることができると思いますか」→「博物館」が他のカテゴリを上回った
- ⑤ 過去に関する感覚：「過去から現在に向けて，社会は良くなったか，悪くなったか，どんなことがそうしたのか」「歴史や過去について，次世代に伝えるべきことは何だと思いますか」
- ⑥ 人口統計学的質問：出生地，民族・文化的グループ，宗教，言語，家族構成，学歴，職業，来歴，郵便番号，インターネットへのアクセス→

➤ 結果：「カナダ人の多くは，現在に自分自身を位置づけ，他者と自分を結びつけ，余暇を満たすために過去に目を向けている。そうした関係における多様なカナダ人の違いに拘るのは間違えである」

- ・ 学歴と収入が高い人ほど博物館を訪れたり，本を読んだりするなどの歴史に関与する傾向
- ・ 所得水準と過去の様々なレベルへの関心や重要性の表現との間には，関連性がなかった
- ・ 歴史や過去に関する活動に興味を持ち，実際に参加しているのは男性よりも女性の方が多い（家族関連の活動は，さらに女性の方が多い）
- ・ 歴史や過去への関心は，年齢が高くなればなるほど高い（全ての年齢層で，家族の中での個人的な過去への関心が高い）
- ・ 家族の物語と博物館は，信頼性を与える連続体の両端→教育・所得・過去への関心が高い人は，博物館をより信頼する傾向
- ・ アボリジニの博物館への信頼性は低く，逆に家族から受け継ぐ物語への信頼性が高い
- ・ 移民は，出身国の過去に関心を持ち，その遺産を自分の子どもに伝えたいと考えている
- ・ 小都市や農村部に住んでいる人は，過去全般よりも身近な過去への関心が高い

### 3. プロジェクトの可能性と限界

- **20分の電話インタビューでは限界がある**
  - 個人の過去に関する考えや理解の複雑さを探ることは困難
  - 無作為電話調査は、経年変化の傾向などを主張することはできない
  
- **一方で、興味を持ってもっと長く話したいと思った回答者も多くいた**
  - 自由形式の質問に答えてもらった
  
- **山のようなデータを分析する方法の依存度**
  - 研究チームの7名による多様な方法は、資金提供者とのルールの下、実施された
  - スナップショット的な結果になってしまった
  
- **集合的記憶や歴史文化などの概念を発展させる一部になる**
  - プロジェクトのユニークさは、従来の公的な記憶の表現ではなく、私的な記憶の表現について、少なからず報告できたこと
  - 従来の記憶研究は、特定の社会集団における特定の出来事の記憶的表現に焦点を当てすぎた結果、人々、グループ、機関の間のコミュニケーション的な相互作用における記憶の生産・実行・普及を無視した言説になってしまっていた
  
- **大規模調査の次の展開**
  - 広範囲にわたる調査の成果を文化的記憶の精度と循環に関する事例研究と統合すること
  - そのための理論的枠組みを作ることが最初の課題
  - そして、その課題を探究するチームと資金提供者のコミットメントが必要